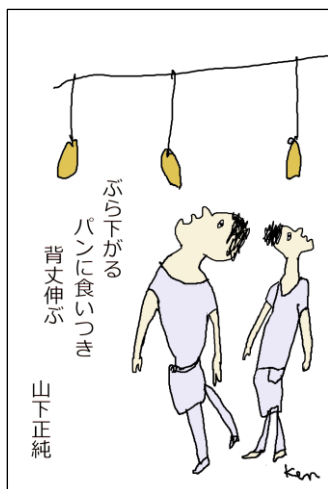




万緑が重くてならず帽子取る

椋本望生

これまで、万緑に重量を感じた俳人はいないね。感じたままを正直に書くと佳句になる。帽子を取るとして行動を具体的に書いたのもいい。



ぶら下がるパンに食いつき背丈伸び

山下正純

「運動会」の季語が隠されており、季語隠しの句である。原因と結果になっていて経過的ではあるが、発想の面白さには脱帽である。



青梅はあれからずつと酒浸り

八塚一青

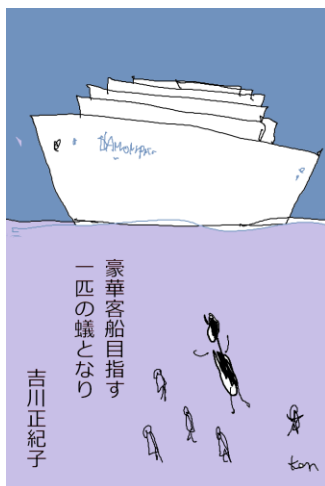
これは擬人化の句。梅酒を梅の立場から詠んだ。「酒浸り」というマイナスイメージの言葉を使い、裏切り構成にしたことで成功した。



赤い腹見せ合い恋の井守かな

花岡直樹

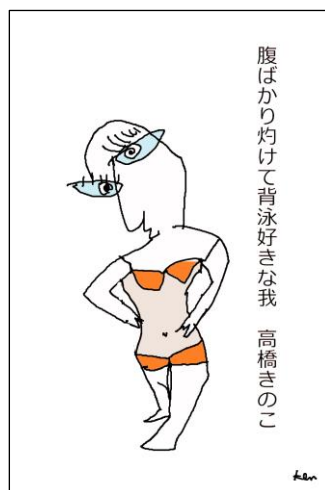
井守の腹が赤い理由がやっと分かりました。恋の井守と断定したところがよろしい。腹を見せ合っているとした物語性もよい。



豪華客船目指す一匹の蟻となり

吉川正紀子

寄港した豪華客船を一目見ようと出かけたら、想像以上の巨大な船体に驚いた。瞬間、自分が急に小さく縮んで蟻になったような気分に。



腹ばかり灼けて背泳好きな我

高橋きのこ

「我」として自虐ネタとするより「彼」として揶揄する方が面白いかもしれぬ。拙句に「背泳ぎの臍(へそ)を見られてしまひけり」がある。